

## 2021年度 JAMS 研究大会のご案内【2022年1月23日(日)ZOOM 開催】

2021年12月11日

2021年度のJAMS研究大会プログラムおよびシンポジウムの詳細をお知らせいたします。

**日時 2022年1月23日(日) 9:30-17:00 ZOOMにて開催**

登録方法 下のリンクから事前登録をしてください。承認後、入室用のリンクを送信します。

事前登録用リンク <https://bit.ly/3HUqMUP>

事前登録期限 2022年1月10日(月)

午前中は公開シンポジウム、午後はJAMS会員のみ参加可となります。

### 大会プログラム

9:15 ZOOM入室開始

9:30 開会挨拶 久志本裕子(研究大会担当理事/上智大学)

9:35 公開シンポジウム趣旨説明 穴沢真(JAMS会長/小樽商科大学)

9:40-11:10 シンポジウム第一部

基調講演: クー・ブー・テイク教授(政策研究大学院大学名誉教授)

*Mahathir Mohamad and the Unforeseen Transformation of Malaysian Politics* (英語のみ)

ディスカッサント: 吉村真子会員(法政大学)

鈴木絢女会員(同支社大学)

全体での質疑応答

11:10-11:20 休憩

11:20-13:00 シンポジウム第二部(日本語) マレーシア研究者が見たマハティールの時代

登壇者: 伊賀司会員(京都大学)

杉村美紀会員(上智大学)

谷口友季子会員(アジア経済研究所)

13:00-14:00 昼休み

14:00-14:40 個別報告1 マレーシアにおけるCovid 19の地域交通への影響

湯川 創太郎 (大阪商業大学)

14:45-15:25 個別報告 2 イスラームからの棄教者の社会的包摂をめぐる問題  
—多民族・多宗教社会シンガポールの文脈から—

市岡 卓 (法政大学)

15:30-16:10 個別報告 3 英領北ボルネオと明治後期の日本—増田幸一郎の木材事業と入植  
計画—

都築一子 (NPO シニアボランティア経験を活かす会)

16:10-16:20 休憩

16:20-16:50 総会

17:00 閉会挨拶 会長 穴沢眞

## シンポジウム詳細

### 「マハティールの時代—マレーシア研究者の視点から」

今年度の JAMS 研究大会シンポジウムは、公開シンポジウムという形でマレーシア研究の外でも関心を集めるマハティールという人物に焦点を当てることにいたしました。シンポジウム第一部では、マハティール研究の大家として知られるクー・ブー・テイク教授による基調講演とディスカッションを通じて、必ずしもマハティールの理念通りには近代化と社会変容が進まなかったマハティールの時代とその後のマレーシアをどのように見ることができののかを議論します。続く第二部では、異なる時代のマレーシアで研究を続けてきた三名の JAMS 会員を登壇者として迎え、それぞれの研究者が研究の過程で見えてきた、または感じたマハティールという人物、並びに彼の時代の特徴について意見交換をします。第一部、第二部を通じて、マハティールという人物の理解を深めるとともにマレーシア社会の理解を深めるとともに、マレーシア研究の魅力を広く知ってもらう機会とすることを目指します。JAMS 会員以外の方々にもぜひお声がけください。

#### Keynote Speech Synopsis

Dr Mahathir Mohamad, twice Prime Minister of Malaysia (1981–2003 and 2018–2020), has long held clear and firm ideas of modernizing and transforming Malaysia. During his first and long tenure in office, he introduced many economic and social policies that he hoped would change the ways Malaysians thought and acted. Not all the changes brought the results that he expected. Nor did people respond to them in the ways that he preferred.

In fact, there was considerable opposition to his rule, ideas and policies for much of the time that he was in power. While he strove for political stability his years in power were full of crises, some of which lay beyond his control. An unforeseen transformation of Malaysian politics, it will be explored in this seminar, arose from the complex interplay between Mahathir's ideas and policies, the conditions in which they were propagated or implemented, and the popular responses to them.

## 個別報告要旨

### 個別報告 1 マレーシアにおける Covid 19 の地域交通への影響

湯川 創太郎 (大阪商業大学)

要旨：本研究では、COVID19 のマレーシアの地域交通（通勤や生活で用いる交通機関）への影響を取り扱う。COVID19 は様々な経済活動に多大な影響を与えているが、地域交通の場合には、外出制限などが行われている中でも一定のサービスを提供することが望まれ、どのように安全性を確保するか、多大な損失を出しつつ経営を続ける企業をどのように支援するかが世界的な課題となっている。

報告者は以前からマレーシアの公共交通の研究を行っており、その知見をもとにマレーシアの研究者と共に COVID19 の公共交通への影響について比較研究を行っている。欧米を中心とした他の先進国との比較については各種メディアでも行われているが、マレーシアや他の発展途上国の状況については情報が少ない。発表では、同国の地域交通がどのような状況にあるのか、どういった問題が生じているのか、それをどのように解決しようとしているのかについて、最新の状況をもとにした報告を行う。

### 個別報告 2 イスラームからの棄教者の社会的包摂をめぐる問題—多民族・多宗教社会シンガポールの文脈から—

市岡 卓 (法政大学)

要旨：近年、シンガポールでは、イスラームからの棄教者が一部メディアで伝えられ可視化する一方、これを受けて棄教に関する宗教指導者の見解が表明され、また、棄教者の当事者によるネットワークが形成されている。

イスラームの教義上、棄教は重大な罪とみなされるため、棄教が公的に認められない社会や犯罪化されている社会も存在するが、シンガポールではイスラーム評議会への届出に

より棄教が法的に可能である。しかし、家族との関係断絶への懸念などから、信仰を失い心の面では棄教者であっても、そのことを隠してムスリムとして暮らす場合も多い。また、棄教者はムスリム社会の中で厳しいスティグマにさらされるだけでなく、非ムスリムからの無理解にも苦慮することがある。

本報告では、19名の棄教者からのオンラインでのインタビューの結果をもとに、棄教者が直面する社会関係上の困難について分析する。その上で、多民族・多宗教社会シンガポールの文脈の下での棄教者の社会的包摂に向けた課題について検討を行う。

### 個別報告3 英領北ボルネオと明治後期の日本—増田幸一郎の木材事業と入植計画—

都築一子（NPO シニアボランティア経験を活かす会）

要旨：明治後期は、義和団事件、日英同盟、日露戦争などを通して日英が接近していく時代であった。義和団事件の日本軍派兵で、佐賀県士族であった増田幸一郎は、通訳を兼ねた日英組の人夫監督として明治33年夏から天津・北京間の物資輸送に従事するが同年末には病気のため帰国した。翌年末、従弟の誘いに応じて米領フィリピンの沿岸貿易を始めるために長崎を出発したが、マニラの政庁から許可が出なかった為、香港経由で、明治35年初頭にサンダカンに上陸した。最初の事業は、思ったような利潤が上がりなかつたので、一行は分裂して同志の大半はサンダカンを去った。増田は、明治36年に旭日商会を設立し、日本人を中心とした木材事業に成功した。その後、増田は一時帰国し、ボルネオ企業会を設立して日本人による入植企画をしたが挫折した。本発表の目的は、なぜ増田が英領北ボルネオ政庁の信用を獲得できたのか、また、入植計画が挫折したのかを検証することである。